

## 産婦人科領域に於ける温泉療法の経験（第6報）

産婦人科疾患による三朝温泉湯治客の  
自覚症状推移について

岡山大学温泉研究所 産婦人科

田中良憲, 細川隆海

種々の産婦人科疾患はリウマチや神経痛、皮膚病等と共に古来温泉療法の重要な適応症となつている。放射能泉である鳥取県三朝温泉にも毎年かなりの湯治客が滞在し、其の内岡大温研産婦人科外来を訪れる者も少なくない。我々は先年此等の患者についての統計的観察を報告したが、湯治客は通院を続けない事が多く、湯治中の全経過は必ずしも判然としなかつた。

我々は前回の報告を補う為、此等の湯治客のうちすでに家庭に帰つている者に手紙による問合わせを行い、湯アタリ、月経、転帰等について、興味のある知見を得たので此処に報告する。

## 方 法

○印をつけ、又は数字を書き入れれば良い程度の簡単な調査表を返信用封筒と共に60人の患者に送り、30人の回答を得

た。以下に述べるのは其の30人についての統計的観察である。

此の様に簡単な方法であるので、詳細な点は判然せず、記憶の間違い等による誤差も避けられないのは当然であるが、湯治の全経過の概要をうかがうに足るものと考える。

## 結 果

## 1. 病名、愁訴（第1表、第2表）

疾病としては子宮後屈症や附属器炎等が多く、湯治の動機となつた愁訴としては、腰痛、下腹痛、月経障碍、不妊症等が多く、当然の事乍ら前報と大同小異である。

第 1 表 疾 患

病名	子宮後屈	附属器炎	腔炎	機能性子宮出血	子宮発育不全	更年期障碍	其他	計
例数	7	5	4	2	2	2	8	30

第 2 表 主 訴

主訴	腰・下腹痛	月経障碍	不妊	帯下	自律神経性障碍	子宮出血	其他	計
例数	10	7	6	4	3	2	8	40

## 2. 入湯期間（第3表）

短期間の例は少数であつて、大多数が2週

間以上滞在しており, 平均は3週間である.

此の点は我々の想像以上に湯治客は認識を  
持つている様である.

第3表 入湯期間

期 間	1 週 間 内	2 週 間 内	3 週 間 内	4 週 間 内	5 週 間 内	以 上	計
例 数	4	9	6	2	7	2	30

3. 1日の入浴回数(第4表)

1日3回の例が最も多く(30%), 3回以内  
と4回以上が相半ばしており, 平均は4回で  
ある. 本邦の湯治場の例に洩れず入浴回数は  
多いのであるが, 後述する様に調査範囲内  
では頻回入浴必ずしも不都合では無かつた. 適  
当入浴回数に関しては今後の問題であらう.

第4表 1日の入浴回数

回 数	以 下	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回	6 回	以 上	計
例 数	1	3	1	9	5	5	5	1	30

3回以内 14人

4回以上 16人

平均4回強

4. 湯アタリ(第5表)

婦人科患者の湯アタリは他とやゝ様相を異  
とする事が判明した.

此の項に回答していない6例は湯アタリが

無かつたものとすれば, 湯アタリ発現率は70  
%であり, 別府温泉に於ける轟木の報告と同  
様である. 全身倦怠(33%), 食欲不振(23

%), 発熱(13%) 其の  
他は異とするに足ら  
ないが, 高率の不正性  
器出血(20%), 腰痛  
又は下腹痛(17%) や  
少数ではあるが帯下増

加(7%) は注目に値する現象であらう. 第6  
表に示す様に, 此の不正性器出血は入湯第1  
週日に生ずる事が多く, 持続は4日以内(平  
均2日)で量は少量であり後障害を残さない  
点より湯アタリと考えて良からう. 出血例の  
6例中5例が他の湯アタリとして腰下腹痛又  
は発熱を訴えており, 又入湯の動機としての

愁訴中腰下腹痛を有  
する患者に出血例が  
多く見られる事等か  
ら, 患者の特定の素  
地の上に出現し易い  
ものらしい. 然し一  
定の疾患に限るもの

では無い.

湯治中の一過性不正子宮出血は前報で我々  
により確認されているが, フランスではY.  
Canel等が報告している. 但し出現率は我々

第5表 湯アタリ

症 状	全 身 倦 怠	食 慾 不 振	不 正 子 宮 出 血	腰 ・ 下 腹 痛	発 熱	帯 下	下 痢	無 シ	(無 記 入)	計
例 数	10	7	6	5	4	2	2	3	(6)	39

の方が著明に高い。

此の様な不正出血の原因として先づ考えられるのは温泉浴による生殖器系の充血である。腰下腹痛と関係が深い事から此れが関与している事は疑い無いが、同じく深部加温を目的とする鉍泥下腹部でんらく療法や超短波照射等の経験から、充血のみでは説明が難かしいのである。近年月経其の他子宮出血の機序として、ホルモン性因子と同時に子宮に於ける自律神経性因子の役割が強調されて来ている。

温泉浴による自律神経系の変化、特に湯アタリ時に於ける其の変調は既に多数報告され

月経量の変化は17%に見られ、増減相半ばしている。

周期の変化した9例の疾患は付属器炎4例、子宮後屈症3例、子宮發育不全症2例であつて、特定の疾患に限つてはいない。

周期変化例を其の湯治日数により分けると、1週以内0、2週以内4例、3週以内1例、4週以内1例、4週以上3例となり、1週以内の短期間滞在を除けば、期間との特別な関係は認められなかつた。温泉入浴と共に生活、環境の変化等が影響して、比較的短期間の湯治によつても周期の変化が起つたのであろう。

第 6 表 不正出血の時期, 持続

時 期	第 1 週	第 2 週	平 均	持 続	4 日	3 日	2 日	1 日	平 均
例 数	4	2	7 日 目	例 数	1	2	1	2	2 日

{ 出血のみ 1例  
 出血+腰, 下腹痛 3  
 出血+腰, 下腹痛+発熱 2

ている所であり、我々は入湯による不正出血は植物神経性、血管性因子に依るとする Y. Canel 等の意見に賛成したい。

5. 月経の変化 (第7表)

此の頃に回答の無い14例を一応

無変化例として数えれば、9例 (30%) に月経周期の変動が認められた。不順な周期が順調となつた例もあるが、順調な周期が一時不順化したと訴える例の方が多い。此れは三朝温泉浴が婦人の内分泌系に著明な変調を与える事を証明しており、動物実験成績を裏書している。

第 7 表 月経の変化

変 化	不 順 ↓ 順	順 ↓ 不 順	不 変	無 記 入	計	量 増 加	量 減 少
例 数	3	6	7	14	30	2	3

6. 使用温泉のラドン含有量と湯アタリ、月経変化との関係 (第8表)

三朝温泉は放射能泉であり、其の含有するラドンは内分泌系、神経系等に作用するといわれている。患者の使用した温泉のラドン含有量と湯アタリ、月経周期変化の発現率との関係を見るため、浴水10中ラドン40マツヘを

境として2群に分け、其等の発現率を調べた。入浴には80マツヘ以上の濃度が必要とされているが、我々の調査例では斯かる高濃度使用例が少なく、統計上意味が少ないので40マツヘを境としたのである。

第8表に示す様に湯アタリ、不正出血、月経周期の変化等の出現率について両群間の差は判然しなかつた。

#### 7. 1日の入浴回数と不正出血、月経変化

ついているとは思われない。恐らく個々の健康状態が重要な因子となつているのであらう。

#### 8. 効果 (第10表)

湯治の効果患者の自覚によつて見ると、有効3例(10%)、著効15例(52%)、無効8例(28%)、悪化3例(10%)となる。即ち有効例は62%に及んでいるが、成績を向上させる為には温泉医による指導、特に適応の有無、湯治中の補助療法等に関する助言が必要

第8表 使用泉ラドン含有量と湯アタリ、月経変化

	例数	出の湯 血湯 ア 以 外 タ リ	不正 出 血	無 し	無 記 入	不 順 ↓ 順	順 ↓ 不 順	不 変	無 記 入
40マツヘ以上	12人	9	2	0	3	2	1	2	7
40マツヘ以下	18人	9	4	3	3	3	4	5	6

(湯アタリ)

(月経変化)

の発現率との関係 (第9表)

入浴回数1日3回以下の例と4回以上の例の2群に分け、不正出血例数と月経周期変化例数を比較したが、大差無かつた。

今回は少数例であるから勿論確定は出来ないが、以上より入浴回数、湯治日数、浴水中のラドン濃度等の入浴条件が、湯アタリや月経周期の変化の発現に対して決定的因子とな

第9表 1日の入浴回数と湯アタリ (不正出血)、月経変化例数

	例数	不正 出 血	月 経 変 化
3回以下	14	4	4
4回以上	16	2	5

であらう。

個々の疾患について言えば腰、下腹痛、神経痛、自律神経性障害には無効例を認めていない。腰、下腹痛の悪化例は適応を誤まつていたものである。更年期障害、月経障害の効果はやゝ落ち、不妊症の6例は何れも妊娠に到っていない。

前報で述べた様に温泉湯治客の大部分は他の医療に失望している者であり、其の62%に有効であつた事は注目し価値しよう。

#### 9. 効果の発現時期と持続 (第11表)

湯治中に既に効果を生じた例と家庭に帰つてから効果を認めた例と相半ばしている。

其の持続は大多数が1年以内である。

第 10 表 効 果

	—	±	+	悪化	計
腰 下 腹 痛	0	1	7	2	10
自律神経障碍	0	0	3	0	3
月 経 障 碍	0	2	1	1	4
不 妊 症	6	0	0	0	6
帯 下	1	0	0	0	1
更年期障碍	1	0	1	0	2
神 経 痛	0	0	3	0	3
計	8	3	15	3	29

第 11 表 効果発現の時期と持続

時 期	湯 治 中	帰 宅 後	持 続	半 年 以 内	一 年 以 内	一 年 以 上
例 数	9	9	例 数	6	6	4

## 結 語

産婦人科疾患による三朝温泉湯治客の内、湯治を終えて家庭に帰っている者60人に問合わせを行い、30人の回答を得た。

1. 疾患及び湯治の動機となつた愁訴は前報と大差無い。
2. 入湯期間の平均は3週間、1日の入浴回数平均は4回である。
3. 湯アタリは70%に認められた。全身倦怠、食慾不振が最も多いが、腰、下腹痛も17

%に発現し、帯下増加も少数例認められた。然し湯アタリ中最も注目すべきは第1週の終りに出現し平均2日間持続する所の不正性器出血である。此れは20%に発現、腰、下腹痛と関係が深い、特定の疾患に限るものではない。

4. 月経周期の変動が30%の例に認められた。不順が順調となつた例よりも逆の例の方が多い。

5. 湯アタリ、特に不正性器出血や月経

周期の変化は温泉中のラドン濃度、湯治日数、1日の入浴回数等の入浴条件よりも、むしろ患者個々の身体状況と関係が深い様である。

6. 患者の自覚によれば、有効62%、無効28%、悪化10%であり、腰下腹痛、神経痛、自律神経性障碍に特に有効であつた。不妊症の6例は何れも妊娠に到っていない。

7. 効果が湯治中に発現した例と帰宅後発現した例と同数であり、効果の持続は大多数が1年以内であつた。

BALNEOTHERAPEUTIC EXPERIENCES IN  
GYNECOLOGY (6)

A STATISTICAL INVESTIGATION ON CHANGE  
OF SUBJECTIVE SYMPTOMS OF 30 GYNECOLOGIC  
PATIENTS IN THE COURSE OF BALNEOTHERAPY  
IN MISASA SPA.

Yosinori TANAKA Ryukai HOSOKAWA

Division of Obstetrics and Gynecology, Balneological Laboratory,  
Okayama University

1. The chief complaints of the patients were lower abdominal pain (33%), menstrual disorder (23%), infertility (20%), etc.

2. As disease, adnexitis (17%), retroflexio uteri (23%), vaginitis (13%), etc. were noted.

3. As balneotherapy they took thermal bath on an average 4 times a day for three weeks in Misasa radioactive spa.

4. Various "Fäder-reaktionen" were noted on 70% of the patients. They were fatigue (33%), dulling of the appetite (23%), small uterine bleeding (20%), lower abdominal pain (17%), fever (11%), vaginal discharge (7%), etc.

5. The above-mentioned small uterine bleeding occurred about 7th day of the cure, and continued for 2 days on an average. In most cases, it was accompanied by the lower abdominal pain.

6. A temporary change of menstrual cycles after the cure was noted in 30% of the patients.

7. In 62% of the cases treated, the spa treatment gave curative effects particularly on various pains and vegetative disharmony, but none on infertility.

---